FUKUI NATURE GUIDE 第9号

森遊

Vol.4(1) 1993

モリアオガエル

5～6月頃、池の上に張り出した木の枝に、泡状の卵を産むことで有名なカエルです。県内には、他にシュレーゲルアオガエルという姿も卵も似た種類がいますが、水田の畦や湿地の地面に穴を掘って卵を産むために、目立たずあまり知られていません。モリアオガエルは県内に広く分布していますが、山地に多く、刈込池や夜叉ケ池が産卵地として有名です。ふ化したオタマジャクシは落下して水中に入りますが、この時イモリに食べられる光景をよく見かけます。　(1993年6月11日　自然観察の森「馬取池」で撮影)

福井県自然保護センター

福井県

野鳥の子育て

文・写真　八田　七郎右ヱ門（ナチュラリストリーダー）

鳥が春にさえずり始めるのは、昼の時間が次第に長くなることに起因すると言われています。「夜飼い」と言われる、元旦にウグイスを鳴かせるという飼い方があります。これは、12月始めより灯りをつけて昼の時間を徐々に長くして春を人為的に作り、ウグイスを正月に鳴かせようというものです。

同様に、鳥の繁殖開始も春の日長時間に刺激されます。しかし、大形の鳥や、モズ、カワガラス、キジバト、ヨタカ（日野山にて観察）では、まだ寒い12月から3月にかけて巣作りが始まります。

野鳥の種によって、いろいろな営巣場所や繁殖方法が見られます。そこで、今まで私が観察したことや知り得たことを紹介します。

①営巣場所

●**裸地**――コチドリ、コアジサシなどの巣は砂利場にくぼみを作り、産座に小粒の石を置くだけの簡単なものです。河原の砂利が採取され、営巣地がなくなったために姿を消したかと思われていたコアジサシが、近年九頭竜川に戻ってきました。

農道脇のコチドリの巣。無事に育ちました。

●**水辺**――カイツブリは水草で浮巣を作ります。バンは川岸近くに、タマシギは水のある草地に営巣します。

●**草地**――キジ、ヤマドリ、ケリ、カルガモ等は畑地や林内の灌木の根元に営巣します。

●**棚・崖地**――イソヒヨドリ、イワツバメ、オオルリ、キセキレイ、カワガラス、ハヤブサ、イヌワシ等は斜面にある棚や崖で営巣します。

木のコブのように見えるサメビタキの巣

●**樹洞・巣箱**――密閉された安全な場所ならば、石垣の隙間でもよく、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ヤマガラ、ヒガラ、フクロウの仲間は、既にある空間を利用します。キツツキの仲間は新しく穴を開けますが、これがディスプレイの行動となります。アオゲラでは生のモウソウチクに営巣したのが観察され、ブッポウソウでは毎年同じ穴を利用しながら掘り広げて、ついには折れてしまったこともありました。しかし、彼らの巣穴となる大木や老木は少なくなってしまいました。

●**樹枝・茂み**――多くの鳥が利用する場所で、オオヨシキリのように数本のヨシに巣を編みつけるものがあります。ホオジロの巣は梢にあったり、枝のつけ根にあったりします。

②巣作り……くぼみ、皿形、椀形、袋状などの簡単な物から、コサメビタキ、サンコウチョウのように外側にウメノキゴケをクモの糸で編みつけた精巧なものまであります。袋状の巣では、上部に出入口のあるエナガ、ミソサザイ、側部に出入口のあるセンダイムシクイ等、それぞれに特徴があります。

巣の材料はいろいろです。ホオジロ、ヒバリ、ウグイスは枯れ草を、シジュウカラ、ヤマガラはトラノオゴケの一種を敷き、産座には動物の毛を用います。

巣材運びは、雌雄共同で行なう種が多いですが、ウグイスのように巣作りから育雛までを雌に一切をまかせ、雄は近くでさえずっている種もあります。また、オシドリも雄は子育てに参与せず、雌は雄を寄せ付けないそうです。(おしどり夫婦とはどこからきたのでしょうか)

③産卵……鳥は種によって１回の営巣で産む卵の数がほぼ決まっています。私の家の軒にかけた巣箱では、シジュウカラが12個産んでおり、ヒバリでは７個の産卵を観察しました。多いのでは、オシドリで32個産卵した例が報じられています。産み終わると抱卵に入り、同時または２、３日かかって雛が孵化します。しかし、フクロウでは産卵と同時に抱卵に入るため孵化が不揃いになり、後から孵化した弟妹の発育が大きく遅れてしまいます。巣立ちしても飛べないフクロウの雛を何度か保護したことがありました。

④擬傷・擬態

抱卵・育雛中に外敵が接近すると飛んで逃げるものもありますが、傷ついた動作をして外敵を巣や雛から遠ざけるものがいます。これを擬傷行動といってコチドリ、イソシギに見られます。

コチドリの擬傷

ササゴイの擬態

擬態は、ササゴイ、ミゾゴイ、ヨシゴイ等に見られます。親、雛ともに首を伸ばし、くちばしを上に向けてヨシや木の枝のかっこうをします。その時、のど元の両側をピクピクさせながらこちらの動きに合わせて首をまわして追視する様はユーモラスに見えます。

⑤給餌……雌雄ともに餌を運ぶものが多いですが、オナガ、エナガ、スズメ、ツバメでは繁殖の手伝いをするヘルパーも観察されています。私の家で営巣したシジュウカラは、頻繁な時は１～２分間隔で幼虫を運んでおり、よく見つけられるものだと感心させられます。

アオバズクの３年間の観察では、19時頃からの15～20分間に集中して給餌していました。５分もかからずに、ガ類、甲虫類を持ち帰り、止まり木で羽をむしり取って雛に与えていました。暗い中でよく見つけられるものだと感心すると同時に、こんなに少なくてよいのかと心配したものです。　　(はったしちろうえもん　鯖江市)

太陽光と自然観察の原点

文・写真　組頭五十夫（ナチュラリストリーダー）

美しい北潟湖の夕陽（秋）

○太陽の光を嫌がる子供達

ずっと以前から気になっていたのですが、太陽の光を嫌がる生徒が増えてきています。私の勤務する中学校の理科室は、日当たりがよいのですが、生徒達は大変困っているようです。真夏の太陽ならわかるのですが、年中いつでも「眩しい」と言って、カーテンを引き（なかには暗幕を引く者もいる）、すぐに蛍光灯をつけてしまうのです。

［場面１］

五月晴れのさわやかな日のことでした。生徒達は理科室に入ってくるとすぐに、カーテンを音を立てて引き始めました。授業が始まり、私が、「カーテンを開けなさい。こんな気持ちのよい太陽の光を浴びないとダメだ。太陽の光を嫌がるのは、カビとモグラだ。」と言って開けさせたのですが、生徒達は、すぐに「眩しいんです。閉めてもいいですか。」と言う始末。これは一体どういうことなのだろうかといつも悩んでしまいます。

［場面２］

修学旅行の帰り道のことでした。生徒達の歌うカラオケを聞きながら、バスの車窓から真っ赤な夕陽をながめて、少年の日を思い出していると、「先生、カーテンを閉めて下さい。」という声が聞こえてきました。「きれいな夕陽だぞ、見てみろ。」と言いますと、またしても「眩しいんです。」とのセリフ。どうして、太陽の光が嫌になってしまったんでしょう。

○太陽の光を嫌がる理由

「眩しいから」でしょうが、なぜ眩しいと感じるのか、その理由を自分なりに分析してみますと、次のようなことが考えられます（独断）。

最近の子どもは太陽光の下での生活時間が大変短く、強い光への耐性がありません。朝７時30分ごろに家を出て、暗くなって帰宅。そして、眠るまでの時間は、殆ど弱い光と人工光の下での生活です。（外での体育があったとしても、週当たり３時間程度です。）光による刺激（勉強、ＴＶ、夜型生活）が長すぎて、身体のホメオスタシス（恒常性）を保つことができなくなってしまっているのではないでしょうか。

動物の体の状態を変化させるのは、ホルモンです。そして、その分泌には光の刺激が極めて重要な意味を持っています。光の刺激は目に入り、間脳→視床下部→脳下垂体に達し、前葉ホルモンが分泌されます。それは、成長ホルモン、副腎皮質ホルモン、生殖腺刺激ホルモンなどです。動物はみな環境の中で生活していますから、その変化に適応して、自分の体を変えています。発育盛りの子供達に長時間の光の刺激（電灯、ＴＶ、夜型生活）を与えるのは、ホルモンバランスを欠き、それが身体的、精神的ひずみを生み出しているのではないでしょうか。長大化、アレルギー、早熟などの原因はこの点にあるのではないか

と思います。

子供達を、24時間光を照射され、卵を産む機械、つまり「養鶏場のニワトリ」にしてしまってはいけません。与えられた餌をたらふく食べ、満腹するとゴロッと寝転び、夜遅くまでＴＶを見て眠りにつく。生きることはすべて他人まかせになり、動物としての生命力、野性的なところがなくなってしまう。子供達を蝕んでいる家畜化現象を何とかして止めなければなりません。

○子供達と自然との付き合いの現状

私は毎年新入生に、実物を自分の目で見たことのある動植物の名前をノートに書かせ、自然体験度をチェックしています。右の表は、今年度の１年生のあるクラスのデータです。動物園、水族館、食卓に出てくるもの（サル、イルカ、ジャガイモetc.）など全部を対象にして書かせたところ、13年間生きてきて、名前を知っている動植物が、たった13種類であった生徒がいるのです。この傾向は、年々ひどくなってきているというのが実状です。このことは、ナチュラリストの皆さんに是非知っておいてほしいことです。

中学1年生対象調査(39名)

		動物	植物
男子	最大	45	51
	最小	8	8
	平均	30	25
女子	最大	60	84
	最小	12	17
	平均	39	46
全体	最大	60	84
	最小	8	8
	平均	36	36

(種類数)

○こんな自然観察会をしてみたい

従来の自然観察会は、「教えすぎ」の一言に尽きると思います。もちろん、参加者のニーズは多様であるし、動植物の名前を知り、生態を知り、自然の美しさに感動することも大切です。しかし、これからの観察会の実施には、参加者の自然体験度を考えると、３段階のステップが必要ではないでしょうか。

(1) 地球上の生物の一員としての存在感を感じる自然体験

- 夜明け前から日の出、南中、夕方から日没、星空を観る。(幼～小学４年)
- 雑木林やブナ林の四季、河川、湖、海で遊ぶ体験をする。(小学４年～小学６年)

(2) 自分を人間であると自覚し、自然を探求する体験

- 川の上流から河口までを見る。カヌーで下れば最高。(小学６年～中学３年)

この段階では自然の名前を覚えることも必要だと思います。(昆虫、野鳥、野草、樹木、地形・地質、天文、その他)

(3) 自分のフィールドを持ち、環境を大切にする観察会（河川、湖、海、山、森林）

日々、太陽の光とともに移りゆく自然の変化を捉えられる感性を持てるように、また自分を育ててくれたと言える「ふるさと」を、全ての子供達が持てるように頑張っていきたいです。　（くみがしらいそお　芦原町）

私の「ふるさと」吉崎（国土地理院）

国旗にかくされたなぞ

自然保護センター　牧野　憲昭

6月4日は、3年4ケ月ぶりに皆既月食を見ることのできる日でした。しかし、残念ながら雨という最悪の天候に見舞われ、観望会を実施することができませんでした。そこで、今回は、下の国旗のデザインを例にして、月についてみなさんとともに考えてみたいと思います。

アルジェリア　シンガポール　チュニジア　トルコ　パキスタン

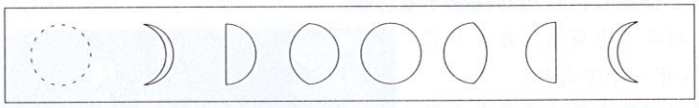
これら北半球にある国々の旗には、共通することがあります。それは、三日月の形をした月と星が描かれているということです。

①これらの月は、三日月？

月は約1か月かかって地球のまわりを1周しますが、その間に月は満ち欠け（太ったりやせたりする）をします。そして、それぞれの月を新月（空には何も見えない）から数えた日数で表します。これを月齢と言います。三日月とは、文字どおり満ち始めて3日目の月のことを言います。ところで、月齢が約26の月も三日月の形をしていますが、天文学的には三日月とは言いません。

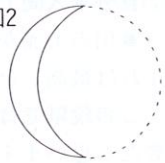
それでは、国旗に描かれた月は三日月なのでしょうか。北半球では、図1のように満ち欠けをしますから、右側が光っている時が三日月なのです。(ただし、同じ地点でも季節によって、また北半球でも緯度によって傾き具合が変わることに注意して下さい。) そうすると、これらの月は三日月ではなく、26日ぐらいの月になります。

図1



月齢　0(29.5)　3.4　7.4　10.5　14.9　19.4　22.4　25.9

図2



②月と星の位置関係はこれでよい？

月が球形であることは知っていますね。そこで、太陽の光が当たらず見えない部分を書き入れてみると図2のようになります。また、月は地球から一番近い天体であることを考えて下さい。すると、例えばシンガポールの国旗のような位置に月と星がきたとすると、これらの星は月に隠されてしまい、見えないことに気が付くでしょう。ですから、この描き方は、科学的な見方とは言えません。このように星が月に隠されて見えなくなることを「星食」と言います。他の国旗については、どうでしょうか。

私たちの周りには、月だけでなく天体の名前が使われたり、模様が描かれたりしたものがあります。なぜそんな名前になったのか、このデザインは、科学的に正確なのかなどいろいろ考えてみるとおもしろいですよ。

(参考文献「おもしろい宇宙の話」ヘレマリン著　東京図書)

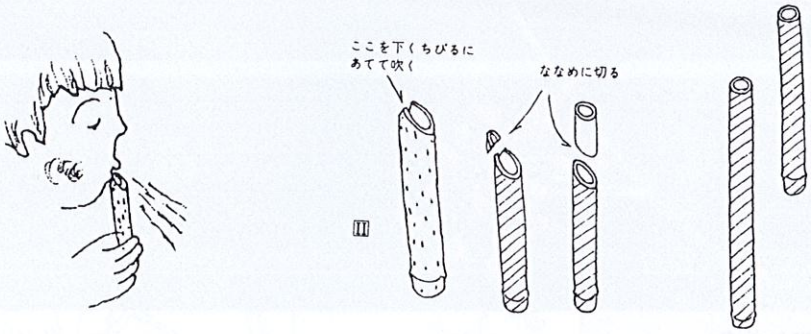
草花遊び

松村　敬二（ナチュラリストリーダー）

イタドリ笛　－　その１（もがり笛）

「もがり笛」とは、竹の垣根に冬の季節風があたり、さまざまな音色をかもし出す笛のことをいいます。図のように、節を持つイタドリの茎を切って、吹き方を変えればいろいろな音が出ます。少し慣れたら、切る角度を変えたり、山形に切ったりして工夫してみましょう。昔なつかしい汽笛（きてき）の音がでます。吹き口とくちびるの角度、息の吹き入れ方などにコツがあります。茎の太さや茎の長さを変えると、低い音や高い音の笛ができます。

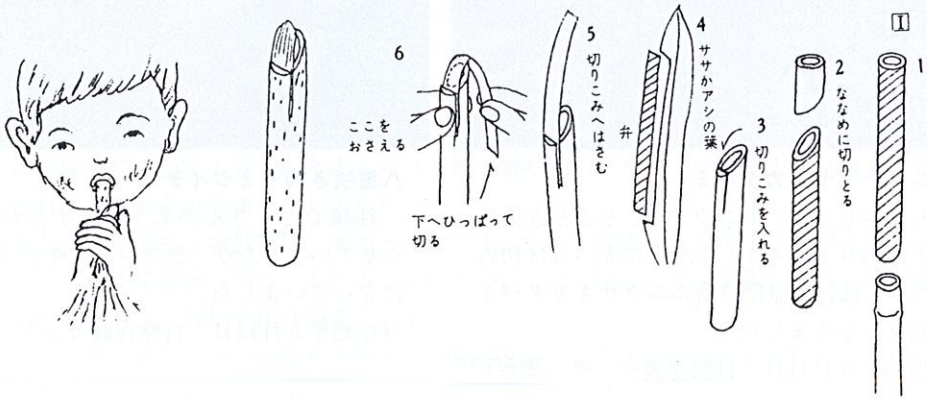
イタドリ笛－もがり笛



イタドリ笛　－　その２

ピピーッとか、ブブーッとか、思わずびっくりするような大きな音が出ます。図のように、振弁をはさまなければなりませんが、振弁が長すぎたり、軟らかすぎたり、かたすぎたり、さけていたりすると、ストン、ストンとつかえて鳴りません。振弁はどの葉でもよいように思いますが、ササかヨシの葉でなければ、鳴りません。一番難しいのは、振弁をはさむ位置の切り目の入れ方です。茎のうすい外壁にカッターで切れ目を入れるのは、なかなか危険なことです。この笛は、イタドリだけではなく、ヨシ・メダケ・ヤダケのような中空の茎があれば、どの植物でも作ることができます。

イタドリ笛－その２



ネイチャー フォト

アカバナマンサク

マンサクの花は、普通黄色ですが、自然保護センターの周辺では、花弁の根元が赤いニシキマンサクや全体が赤いアカバナマンサクが混じって生えています。写真のものは、その中でも一番赤みの濃いものです。　(1993年４月15日　自然保護センター撮影)

ベニバナミヤマカタバミ

もう少しうすいピンクのは、ときどき見たことがありましたが、こんなに赤いのは初めてです。最初、帰化植物のムラサキカタバミと見まちがえました。

(1993年５月11日　自然保護センター撮影)

八重咲きのモミジイチゴ

林縁でたくさんのモミジイチゴが花を咲かせていましたが、その中の数株が八重咲きになっていました。

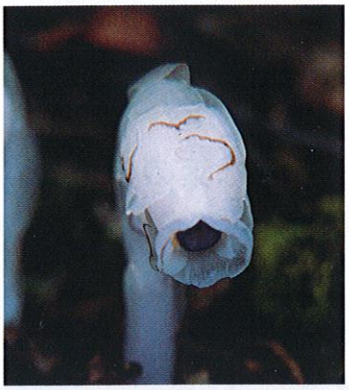
(1993年５月12日　自然保護センター撮影)

腐生植物発見

5月中旬、南条町の山でギンリョウソウを見つけました。2本並んでいるもの、4，5本群生しているもの等がありました。

あいにくカメラを持っていなかったので、翌日、改めて撮影しに行ってきました。白い花がとてもきれいでした。山頂まで登りましたが、ギンリョウソウがあったのは二か所だけでした。

（1993年5月11日　井上清一氏撮影）

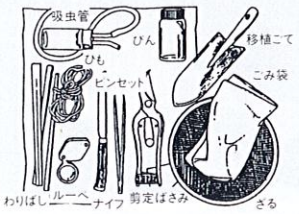


ナチュラリストリーダー派遣研修に参加して

ー野外生態実習「土壌動物の調べ方」ー　井部　正興（ナチュラリストリーダー）

5月22(土)～23(日)，ＪＲ目黒駅より徒歩約10分の所に位置する国立科学博物館附属自然教育園（迎賓館の横）の研修に参加しました。講師は、横浜国大環境科学センター原田洋助教授でした。

図1.調査用具と方法



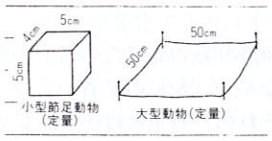
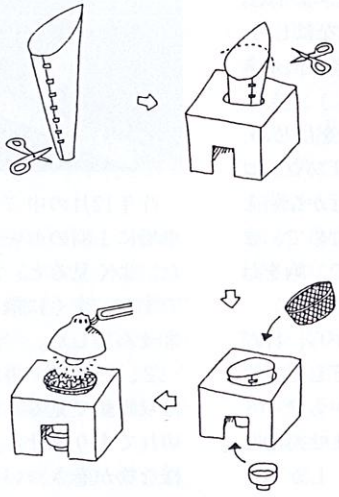


図2.簡易ツルグレン装置



調査の実行上適当な土壌動物の区分

調査区分	取り扱う動物群（類別群）	
大形動物 (macrofauna)	渦虫 陸虫 ミミズ ヒル カニムシ ザトウムシ サソリモドキ クモ ヨコエビ 等脚類 ヤスデ ムカデ 結合類 イシノミ ガロアムシ	直翅類 ハサミムシ ゴキブリ シロアリ チャタテムシ シロアリモドキ アザミウマ 半翅類 絹翅類 双翅類 甲虫(成虫) 甲虫(幼虫) アリ
小形節足動物 (micro-arthropods)	カニムシ ザトウムシ ダニ クモ 等脚類 ハマトビムシ 少脚類 ヤスデ ムカデ 結合類 カマアシムシ トビムシ	コムシ シミ シロアリ チャタテムシ アザミウマ 半翅類 絹翅類 双翅類 甲虫(成虫) 甲虫(幼虫) アリ

初日は、講義と実習（園内、自然林での地表面に存在する色々な材料のサンプリングと肉眼による採集同定・算定）を、2日目は、実習（簡易ツルグレン装置にかけての動物抽出と顕微鏡下での同定・算定）とまとめ（大形土壌動物のグループ分けと土壌動物を指標とした自然の豊かさの評価）をしました。

対象となる主要な土壌動物は、表のとおりです。次に、調査用具と方法は、図1のとおりです。小形節足動物（ダニ、トビムシ等）については、図2に示す装置により、40W電球で24時間照射後、材料を採り調査します。

今後できれば県内で同じ調査を実施し、土壌動物からみた県内の「自然の豊かさの評価」地図を作成したいと思っています。

自然大好き――――

ナチュラリスト通信

おばけのような大きな葉のタイミンガサ

昭和８年に、京大の田代善太郎先生をタイミンガサの自生する現地に案内したというＩさんは、高齢ですが今なお健在です。

タイミンガサの葉は、ヤブレガサに似ていますが、ずっと大きく、直径が65㎝以上にもなるたて状のカサの形をした珍しい植物です。私も、ぜひ一度見たくて、Ｉさんに案内していただきました。その場所は、敦賀市奥麻生の山中です。なにしろ、道という道はなく、谷川につかっては登る沢歩きの険しい道でした。

ここは植物相が豊富で、タイミンガサをはじめ、ヤマシャクヤクやシャクナゲ、ミカエリソウ、コバンノキ、ヤドリギ等よほど深い山に行かないと見られないものが多数あると聞いていたので、まるで宝の山でも探検するような気持ちで、胸をはずませていました。

何回も何回も谷川に足をすべらせながら、汗びっしょりになって登って行きました。そして、ようやく目的地に着きましたが、残念ながらタイミンガサは、元あった場所には見つかりませんでした。Ｉさんも私も、がっかりしました。しかし、Ｉさんは、大きな声でおっしゃいました。「ここまで苦労して来たんだから、もう少し上に登ってみよう。」

一気にかけ登っていったＩさんが、上の方から、「ここに、あったよ。」と叫びました。私達も後から喜び勇んで、かけ登りました。夢にまで見た、あの大きな葉っぱのタイミンガサが見つかったのです。その時の感動は、いつまでも忘れられません。

－後略－

（柴田　亮俊　ナチュラリストリーダー　敦賀市）

失われていく自然

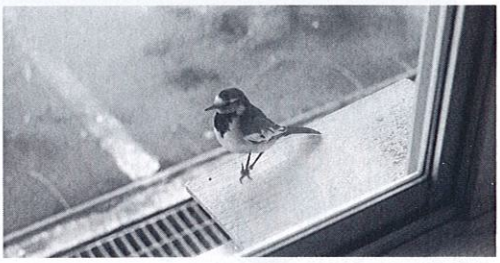
最近は本当に動物の住める自然が減り、深刻な問題になっていることは、誰もが承知の事実であります。私の住んでいる田舎の町でも、昔はいろいろな鳥、昆虫、小動物が生息しておりましたが、現在はめったに見る事ができません。特に、イモリ、ゲンゴロウ、タガメ、カブトムシ、クワガタ等の野生のものは、どこへ消えたのでしょうか。

私がナチュラリストとして特に力を入れたいのは、絶滅の危機に直面している動物を可能な限り人工繁殖することであります。

子供達の中でもカブトムシくらいは飼育したことがあると思いますが、私は、ゲンゴロウ、タガメ、ホタル等をもっと繁殖させる人を育成することが、真のナチュラリストの活動だと思います。

（村田　雅樹　ナチュラリストサブリーダー　福井市）

片足のセキレイ！



昨年12月の中ごろのことです。公民館の前の駐車場に１羽のセキレイが舞降りるのを目撃しました。よく見ると、足に何かが巻きついているようですが、すぐに飛び立っていったためよく分かりませんでした。

２、３日後、再び舞降りるのを見たので、今度は双眼鏡で見ると、なんと、左足の足首から先は切れてありません。それに、右足にはナイロンの様な物が巻きついていて、セキレイは、しんきくさいのか口先でつつくのですが、なかなかとれないようでした。

天気がよかったせいか、正月休みが過ぎた後も、毎日のようにやってきました。そこで、餌（ミミズの様なミルウォーム）を買って来て、セキレイが、いつも降りて来る所に蒔いておいたところ、食べていったようでした。

今では、舞降りたのを見てから私が餌を持って玄関先に出ると、はばたいて２ｍくらいのところまで近寄ってくるようになりました。けがをした鳥獣は、人になつきやすいと聞いていましたが、

わずか10回余の餌蒔きで、こうも慣れるとは思いませんでした。

なお、片足の都合からか、絶対に木の枝や電線にはとまれない様です。

(伊藤　守　ナチュラリストリーダー　勝山市)

自然と私

時水（武生市蓑脇町大平山中腹・2時間おきに湧く冷水間欠泉）

どんな状態になって変化するのだろうか。疑問を感じ大平山に向かった。林道終点からの山道は、道幅が狭く急登続きである。そのため、足元に気を配って一歩一歩踏みしめながら登った。所々に味真野地区の有志の方が作ってくれた標識があり、道に迷うことはなかった。

どこかな、まだかなと心をときめかせながら時々あたりを見回し、若葉に目を休めたり、谷間を見下ろしたりして結構楽しい山登りになった。30分位登ると左に折れ、下り道になった。すると、そこに激しい水音がして幅30ｃｍの小川に水があふれるように流れていた。また、土管からは滝のように、そして、鉄砲水のように流れ出ていた。冷たい水だった。川の中に毎分○㍑という目盛と水深○cmの目盛があったので、両方をすぐ調べてみた。

蓑脇集落から観測するための直径１ｍ位の大きな時計のような板があり、これは、水位が変わると針が動いて目盛を読めばよいという工夫されたものであった。

見ている間に水量が変化するのである。水は、トンネルのような穴から出てくるので、水源から湧き出る様子は見られないが、ある一定の時間ごとに水量が変化するのは不思議だった。標高300m程の山ふところから豊かな水が、絶えることなく出るという事も感動する一つの事実だったが、それが変化するのだから…。

もう一つ自然界の偉大な力に私の心は動かされた。

――部略―

(武生市　ナチュラリストNo.456　山本きみ子)

春の異変２題

ウシガエル…例年、沈丁花(ジンチョウゲ)が咲く頃、わが家の池に数十匹のウシガエル（三国方面では、ガマガエルと呼んでいる）が訪問し、あまりの多さに困っていましたが、今年は４月下旬になって初めての六匹のみの訪問しかありませんでした。近くの田んぼでも、あの牛のような鳴き声は殆ど耳にしていません。三国町だけの異変でしょうか？　皆さんのところでは、いかがでしょうか。

エノキ（ヨノキと福井地方では呼ばれる）、ケヤキの虫害滋賀県でも確認…裏庭のヨノキが虫害による早期落葉と６～７月にかけて二番芽が出て始めて本来の青々とした姿になる……こんなことが数年続いています。昨年、嶺北、嶺南地方から161号線に沿って大津市までのエノキ、ケヤキについてその虫害状況を調べましたが、虫害のない樹は殆ど見られませんでした。

甲虫（約３㎜で跳ねるようにとぶ――まだ検索しておりません）によるものと思われますが、これほど広範囲に虫害が発生するとは、驚きの一言につきます。

(太田　朗夫　ナチュラリストリーダー　三国町)

早起きは三文の得

最近、娘から犬を預かったが、朝の５時に起こされる。５月１日土曜日、今日も５時に起こされた。眠いが、犬が鳴き止まないので、連れていつものコースである10度の緩い林道を溜池に向かって歩く。池の水面が見えだすと、静かに鴨にさとられないように、双眼鏡を構えながら忍び足で進む。

一羽が池の真中にじっとしている。一瞬、目を疑った。何故なら、オシドリだったからである。五色とも七色とも口では言いようのない、色彩鮮やかな雄のオシドリだった。

仏教では、極楽浄土を絵に表したものを極楽曼陀羅と云うが、正に極楽鳥の趣で、普通は鳥の図鑑か、動物園でお目にかかるものを我が家の隣で見たのだから、感動した。

これで眠気も吹っ飛んだが、その瞬間彼氏（雄オシドリ）も飛び立って、池の東淵にある大杉の高さ約25mあたりの枝にとまった。樹上でも梢よりだ。その行為も初めて知って驚いた。何故なら、水面をすいすい泳ぐだけかと思っていたからである。これで明日からの犬の散歩にも楽しみが加わった。

オシドリは、いつごろからこの池に飛来するようになったのか知らないが、もし、住みつくとすれば、このおしどりと当分付き合うことになるだろう。それにしても雄一羽とは、なんとも気にかかる。ところが、５月５日には、おしどり夫婦でいるところを見ることができた。このオシドリと、朝面会できる限り、よい目覚ましになるだろう。

――部略―

(上田　直　ナチュラリストNo.751　鯖江市)

海での新しい発見を求めて

越前松島が、海岸動物の観察に最適の場所だということをご存知でしょうか。

水族館の北隣の民宿街を通り抜け、遊歩道の終点が芝生の広場になっています。ここは長茶ケ浜と呼ばれる小湾状になった磯浜です。潮間帯には、カモガイ、ヨメカガサなどのカサガイの仲間や、アラレタマキビなどの巻き貝、イガイなどの二枚貝、あるいはカメノテなどの節足動物が、てんでばらばらのように見えながらも、ある規則性を持って岩一面にびっしりとはりついています。

また、少し潜って海底の転石の下を見ると、うじゃうじゃと群がるクモヒトデの大群やサザエの殻をしょった大型のヤドカリに驚かされます。魚類も豊富で、キュウセン、ホンベラ、オハグロベラなどのベラ類や、スズメダイ、ウミタナゴなどの幼魚の群れ、岩場の根元にはメバルの群れやカサゴ、キジハタetc.温帯の魚類の他に、9月、10月にはソラスズメダイ、オヤビッチヤなどの暖海種も見られます。

今年の海水浴シーズンももうすぐ、皆さんもお子様連れで出かけてみませんか。海の中を眺めていると、必ず何か新しい発見があるはずです。　――部略―

(夏梅　晃一　ナチュラリストリーダー　福井市)

センターだより

バードウォッチング　ウォーク(5/9)

―県内5ケ所で200名の参加―

愛鳥週間の行事として、日本野鳥の会福井県支部と共催で開催しました。春の渡り鳥や子育て真っ最中の小鳥を観察することができました。アンケートから、参加された方々の印象に残った野鳥を拾いあげてみると、勝山市大師山でクロツグミ、鯖江市西山公園でキビタキ、福井市足羽山でシジュウカラの子育てだったようです。これから7月中旬までは、ほとんどの野鳥が子育てで活発に活動する季節です。ちょっと足を止めて、観察してみて下さい。きっと、野鳥たちが精一杯生活しているかわいい姿を観察できるはずです。

自然観察会「湿原の植物」(5/23)

―敦賀市池ノ河内湿原―

早朝まで残っていた雨が上がり、緑が冴えわたる中での観察会となりました。観察地の池ノ河内湿原は、その貴重な自然を守るために県が自然環境保全地域に指定しているところです。

この日は、木道を歩きながらヤナギトラノオやミズドクサなど、県内ではこの湿原でしか見られない植物を観察することができました。珍しい植物が、ここでは当たり前のようにたくさん生えていることに参加者の皆さんも驚いていました。

最後に、駐車場に使わせてもらった空き地の清掃を全員で行い、自然保護に一役買っていただきました。

目　次

表紙 …… 1
野鳥の子育て …… 八田七郎右ヱ門 …… 2
太陽光と自然観察の原点 …… 組　頭　五十夫 …… 4
国旗にかくされたなぞ …… 牧　野　憲　昭 …… 6
草木と遊ぼう …… 松　村　敬　二 …… 7
ネイチャーフォト …… 8
ナチュラリストリーダー派遣研修に参加して …… 井　部　正　興 …… 9
自然大好き・ナチュラリスト通信 …… 10
センターだより …… 12

☆この冊子は福井県自然保護基金によって作成されたものです。

FUKUI NATURE GUIDE　森遊(しんゆう)　第9号

〈Vol.4(1) 1993〉

発行日　1993年6月30日発行
発行者　福井県自然保護センター
〒912-01 福井県大野市南六呂師169-11-2
TEL 0779-67-1655
FAX 0779-67-1656
印　刷　朝日印刷株式会社